



増えたことで、より適切で自然な表現の返答が得られます。

ただ、無料版であつても十分に機能を活用することができません。ここからは、無料版の活用方法とそのポイントをご紹介します。

### 活用例

実際に筆者が利用したうえを感じた最も重要なことは、ChatGPTが返答を生成するための質問文である「プロンプト」を工夫することです。人との対話では多少言葉を省略しても意図が伝わることもありますが、ChatGPTとの対話では丁寧に、わかりやすく、できるだけ簡潔にプロンプトを入力することがポイントです。実際、プロンプトを工夫しながら対話した例が図3であり、DXについて対話をしています。

まず、最初にユーザーがChatGPTに対して属性の設定を行うとその属性に応じた内容で返答します。たとえば、Q1ではユーザーの属性を「34歳会社員」としています。同様の内容で、たとえば「小学生」とすればよ

図3 ChatGPTの活用例

**Q1**  
YU 私には34歳会社員です。これからDXを社内で推進していきます。DXとは何か、100字程度で簡潔に教えてください。

**A1**  
DXとは、デジタル技術を活用して業務プロセスやビジネスモデルを変革し、新たな価値を創造する取り組みのことです。データ分析や人工知能、ロボティクスなどの先端技術を駆使し、組織の効率性や生産性を向上させることが期待されています。

**Q2**  
YU DXを推進するために大切なことを3つ教えてください。

**A2**  
1. ビジョンの明確化: DXにおいては、どのような目的を達成するために取り組むのかを明確にすることが重要です。組織全体で共有されるビジョンを定め、その実現に向けた方針や目標を設定することが必要です。  
2. リーダーシップの確立: DXは組織変革の一環であり、その推進にはリーダーシップが必要です。DXに関する知識やスキルを持つリーダーを配置し、組織全体を巻き込んだ取り組みを行うことが重要です。  
3. イノベーションの促進: DXは従来のやり方を変えるものであり、新しいアイデアやプロトタイプが必要です。イノベーションを促進するために、社員が自由にアイデアを出し合える環境を整備し、試行錯誤を繰り返すことが重要です。また、失敗を恐れずに挑戦する文化を醸成することも必要です。

**Q3**  
YU イノベーションの促進を図ることが重要と思いました。社員が自由にアイデアを出し合える環境を整備するにはどのようにすればよいですか。100字程度で簡潔に教えてください。

**A3**  
社員が自由にアイデアを出し合える環境を整備するためには、以下のような施策が有効です。①アイデアボックスの設置、②社員のスキルアップ研修の提供、③社内イベントの開催、④社員参加型のアイデア募集コンテストの開催、⑤上層部の積極的なサポートと参加。これらを通じて、社員が自由にアイデアを出し合える風土を醸成することができます。

次に、簡潔な内容の返答を受けるために返答の文字数や返答数の制限を行います。たとえば、Q1やQ3では、「1000文字」と字数の制限を行い、Q2では「3つ」と返答数の制限を行います。

実際、Q1の質問に対してA1では「業務プロセスやビジネスモデルを変革し、新たな価値を創造する取り組み」というDXの定義を示し、DXが今後、「組織の効率性や生産性を向上させることが期待されている」

と返答しました。

Q2でDXを推進するために大切なことを3つと質問すると、A2で、「ビジョンの明確化」「リーダーシップの確立」「イノベーションの促進」と返答しました。その3つのポイントのうち、「イノベーションの促進」が重要だと判断し、返答内容についてさらに深掘りした質問をQ3で行うと、A3で有効な施策を返答しました。

このように、今回の対話でChatGPTは「比較的妥当な返

答」をしました。

その他の活用方法について2つ紹介します。

1つ目は、議事録や文章の要約を行うことです。「あなたは、編集者です。以下の文章を要約してください。」と最初に入力したうえで、会議内容や文章を入力します。すると、ChatGPTが文脈を理解し、主題や意図を把握しながら簡潔な文章にまとめて返答します。

2つ目は、英語で対話を行うことです。AIはインターネット上の膨大なデータを学習していますが、その情報量は英語の方が日本語より多い状態です。そのため、英語で質問し、英語で返答を受ける方がより適切な内容で返答が得られる可能性があります。

日々、生成AIは進化をとげています。活用するうえで正確性の問題や情報漏えい等のリスクはありますが、ポイントをおさえて活用し、生産性向上や業務の効率化に役立ててはいかがでしょうか。

(株)京都総合経済研究所  
チーフエコノミスト 佐々部昭一  
研究員 藤木雄介